

平成 27 年 7 月 27 日

会員各位

(一社)香川県作業療法士会
会 長 植野英一
学術部長 中川真人

平成 27 年度 第 2 回学術研修会について(ご案内)

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より(一社)香川県作業療法士会の活動につきましては格別のご理解とご協力をいただきまして厚く御礼申し上げます。

さて、このたび平成 27 年度 第 2 回学術研修会を下記の通り開催する運びとなりました。ご多忙中とは存じますが、多数の研修会へのご参加をお願いいたします。

敬具

記

【日 時】 平成 27 年 10 月 11 日(日) 10:00～15:20 (※受付 9:30～)

【会 場】 サンメッセ香川 中会議室

【テーマ】 「作業療法らしさって何だろう？」

【内 容】

10:00～ 講義&ワークショップ① 作業療法らしさが見えにくくなった理由

11:10～ 講義&ワークショップ② 作業療法の焦点と介入手段：「らしさ」が見える
作業療法で用いるべき正統な活動とは？トップダウンアプローチって
何？作業療法における「クライアント中心」を本当に理解しているか？

12:10～ 昼食

13:10～ 講義&ワークショップ③ トップダウンとボトムアップアプローチ、作業を用
いた観察評価入門：作業の可能化の為に効率よく情報収集する技術・コツ
を身につける

14:20～ 講義&ワークショップ④ 作業の治療力：エビデンスを知って多職種やクラ
イアントに説明できるようにする、作業療法の将来性と「今、すべきこと」
質疑応答

【講 師】 茨城県立医療大学 教授 齋藤さわ子先生 (作業療法士)

※プロフィールは別紙参照

【参加費】 <香川県士会員> 無料 (※県士会会員証提示)

<非 会 員> 1,000 円

<学 生> 無料 (学生証提示)

【定 員】 40 名

<申込み方法>

◆8月7日（金）～9月18日（金）17：00までの間、メールにて受け付けます。

※申込が定員になり次第、締切りとなります

◆メールアドレス：sanukiot@yahoo.co.jp

①～⑥まで記入の上、申込みください。

※件名は「**第2回学術研修会申込み**」と表記してください。

- ①施設名（学生は学校名を記載）
- ②参加者氏名
- ③香川県作業療法士会入会の有・無
- ④日本作業療法士協会会員番号
- ⑤臨床経験年数
- ⑥質問や困っていることなど

◆参加可否について：ご連絡いただいたアドレスへ返信いたします。締め切り後の申込みについては返信しかねますのでご了承ください。携帯アドレスの場合、こちらからのメールが届くよう設定の確認をお願いします。

また、申込みメール後1週間しても返信がない場合はお問い合わせください。

◆その他：日本作業療法士協会生涯教育ポイント対象研修会になっております。確認させていただく場合がありますので、日本作業療法士協会の会員証も併せてご準備ください。

<香川県作業療法士会会員証について>

- ・香川県作業療法士会会員証提示にて会員参加費とさせていただきますので、忘れずご持参いただきますようお願いいたします。
- ・研修会参加時はネームタグに入れて参加者の証明とさせていただきます。
- ・新入会員、転入会員の参加者は間に合わない場合、県士会入会の証明証となるものをご持参ください。

<問い合わせ先>

かがわ総合リハビリテーションセンター
作業療法士 馬場広志
E-mail：sanukiot@yahoo.co.jp
〒761-8057 香川県高松市田村町 1114 番地
TEL 087-867-6008 / FAX 087-865-3915
(※メール優先でのお問い合わせをお願いします)

以上

講師(齋藤さわ子先生)プロフィール

【現職】 茨城県立医療大学 作業療法学科 教授

作業療法士になって、かれこれ 28 年。

5 年目位までは、身障・老年期領域、総合病院・老人病院・訪問作業療法で基本的には疾患に基づくボトムアップアプローチ。高次脳機能障害や知覚障害へのアプローチが、PTとの違いやOTの専門性を際立たせる鍵となると錯覚？していた。

6 年目位に、作業療法士としてのアイデンティティーを探しに、コロラド州立大学大学院修士課程に進学し、作業中心の作業療法実践、作業療法理論を学び直し、在学中に作業療法の専門性は「作業」であることを確信、作業中心の作業療法実践が理想だと思う。一方で日本人への臨床実践でそれが本当に適応するのか疑念も持つ。

8 年目位から、作業中心の作業療法実践を試みる。1 年間し続けて、クライアントから他職種と混同されることがなくなり、クライアントの作業参加が確実にようになっていくことを実感し、「本当に使えるのか？有効か？」という疑念が晴れる。以来、作業中心の作業療法実践をし続けている。

その後、作業を用いた治療・介入の幅を広げたくて、札幌医科大学大学院博士課程に進学し、作業科学を学び、作業を中心に考えることで、作業療法の可能性と将来性が広がることを実感。また、他の作業療法士にも、作業中心の実践してもらいたくて、研修会の開催、研究会の立ち上げ、養成校教育、本の執筆を行っている。